ジャズの巨人たち⑤　ライオネル・ハンプトン《スターダスト》

エンターテインメントの神化
——ヴァイブの巨匠を偲ぶ永遠の名演

さる8月31日、ヴィブラフォン（ヴァイブ）の巨匠ライオネル・ハンプトンが94歳の生涯を閉じた。モダン・ジャズ・クヮルテット（MJQ）のミルト・ジャクソンの訃報（'99年）に次ぐ彼の死で、ヴァイブ界は一挙に2本の大きな柱を失ったことになる。

ハンプトンはジャズ史上最初にヴァイブを独立のソロ楽器として確立した最大の功労者であり、片やハンプの奏法をモダン・ジャズに進化させた立役者がジャクソンだった。とりわけハンプトンは、ジャズ史上最初の巨人として誉れ高いルイ・アームストロングと親しく共演した間柄であるばかりでなく、ベニー・グッドマンが30年代半ばに史上初めて黒人を採用してグループを編成したときの最初の黒人演奏家として忘れられない。こうした輝かしい経歴を誇る巨匠といえば、ハンプトン亡き今ではベニー・カーター（1907年生まれで現在も健在！）しか思い浮かばない。まさに最後の偉大なる“星”のひとつが消え去ったとの思いを深くする。

＊

ハンプトンが演奏家としての第一歩をしるしたのは1928年のことで、ちょうど20歳だった。このときの彼はドラマーだった。折しもジャズ界にルイ・アームストロング旋風が巻き起こっていた最中のことだ。

彼がヴァイブに手を染めたきっかけは30年秋、そのアームストロングの吹込に参加したときのこと。たまたま現場にあったヴァイブをルイに勧められるまま叩いたのだという。それがうまくいったとは何やら出来過ぎているが、この楽器のいわば申し子なのだろう。

ハンプトンといえば、映画《ベニー・グッドマン物語》でグッドマンと共演した『メモリーズ・オブ・ユー（あなたの思い出）』を記憶している方もおられようが、彼にとっての初吹込で、初めてヴァイブで演奏したのがこの曲だった。それはヴァイブがメロディー楽器として解放された瞬間であり、半世紀以上にわたってこの楽器の第一人者として大車輪の活躍をすることになる第一歩でもあった。

＊

スターダスト

ハンプトンを代表するこの名演は47年8月、西海岸パサデナ市の公民会館で行なわれたコンサート形式ジャム・セッションの実況盤である。ジャム・セッションは本来、無名の演奏家が一流プロの中に飛び入りしてキモ試しをする演奏の場を意味したが、このころになると名のある演奏家を一堂に集めて行なう一種の客

悠　雅彦（音楽評論家）

（DECCA/DL9055）

寄せセッションへと変化する。ここでも御大ハンプを筆頭に当時のスウィング派の名手が顔をそろえた。ハンプトン名義の演奏は4曲中『スターダスト』の1曲だけだが、しかしこの1曲こそ即興演奏家としての彼の真価を不滅のものにする、ジャズ史上に名高い名演となった。

曲はホーギー・カーマイケルが29年に自身の失恋をもとに作曲したといわれるABAB形式32小節の作品。器楽演奏とヴォーカルとを問わず録音の多い人気曲ではあるが、歌ならナット・キング・コール、演奏ならハンプトンと誰もが太鼓判を押す決定版。実際、この両者を超える『スターダスト』にはお目にかかったことがない。

本演奏は短い序奏に続くウィリー・スミス（as）の主題提示から始まる。スミスは前記カーター、ジョニー・ホッジスと三羽烏を誇ったスウィング時代の名手。続くソロ・パートをチャーリー・シェーヴァーズ（tp）、コーキー・コーコラン（ts）、スラム・スチュアート（b）が1コーラスずつリレーし、この後トミー・トッド（p）とバーニー・ケッセル（g）が半コーラスずつを分け合う。満天の流れ星を模したシェイヴァーズ、アルコ（弓弾き）とハミングのユニゾン奏法という寄席風？　の名人芸で場内を爆笑させるスチュアートなど、文字通り面白いし、どれも名演だ。

そして最後に、満を持して御大が登場する。ソロはたった3コーラスだが、中身の濃密さはその何倍もの大熱演に匹敵する。その変化に富んだヴァイタルなマレット捌きの生むアドリブの妙技が、パッセージが次から次へと繰り出されるそのつど、聴衆を熱狂の渦に巻き込んでいくスリルはいつ聴いても圧巻。ヴォイスを合の手がわりに使ってノリを高めたり、倍テンポのリズムに乗って音を畳みかけたりと、随所に聴きどころを配したエンターテインメント性に富むこの3コーラスが、何と聴く者の心を躍らせ、また心を満たしてくれることだろうか。

＊

ジャズは難しいといって逃げる人がいるが、そんな人にこそ聴いてほしい。どこまでもエンターテインメントに徹しながら、結果はすばらしい芸術、いや比類ないジャズにしてみせる――まさに職人魂が生んだ名演。舞台に立てば倒れるまでやる、その信条を生きた男の晴れ姿を見る思いがする。